

美濃の地歌舞伎衣裳展③

勇壮の美

よてん は おり
～四天と羽織～

を開催

平成13年6月2日(土)～7月15日(日)

地歌舞伎は、江戸時代末期から、神社の祭礼と結びついて各地に広がりました。可児にも宮舞台が各所にあり、盛んに上演されていた様子がうかがえます。近所の皆で創り、演じ、楽しむ。農作業の合間の娯楽でした。

普段の生活ではとても考えられないほどの贅沢が許されるのも、地歌舞伎の楽しみでした。そのひとつが、豪華な衣裳が着られることです。特に、四天には龍や鷲などの動物が、迫力いっぱいに表示されているものが数多くあります。

3回目を迎える美濃の地歌舞伎衣裳を紹介するシリーズ。今回は、男物の衣裳の中でも特に豪華さが際立っている、四天と羽織に焦点をあてて紹介します。



昭和22年10月
「菅原伝授手習鑑」
四段目 寺小屋
(個人提供)

I は おり 羽織の世界

羽織には、室内ではおるもの、屋外で着用する陣羽織、ぶっ裂き羽織などの種類に分けられます。

ぶっ裂き羽織とは、江戸時代に武士が着ていた羽織で、後身ごろ中央のすそが割れています。陣羽織は、戦闘の場面で着用される袖なしの羽織です。衿に錦の布を使って高価な仕立てにしたり、金糸で刺繍を施したりと、力強く見せる工夫がされています。

一方、室内で着用する羽織は、一番外側に上着としてはおる衣裳でもあり、より一層見栄えがするように仕立てられています。その人物の地位や財力を誇示し、一目で役柄が分かるよう表現されるのです。多くは、金糸を使って力強く動物を縫い付けたり、吉祥文をとり入れて優雅に表現しています。



黒天鷲絨地金繡松鷹文 羽織

(くろびろーどじ きんしゅうまつたかもん はおり)

太くずっしりと重みのある松に、悠々と翼を広げた鷹を中央に配します。両袖にも前身ごろにも、余す所なく松の枝を力強く広げ、雄々しさが伝わってきます。全て金糸を使い、一身に贅を集めています。衿も亀甲花菱文で飾り、衣裳全体の雰囲気をも更に強調しています。

松は、「菅原伝授手習鑑」に登場する三つ子兄弟の一人、松王丸を象徴しています。四段目寺小屋の段では、雪持ち松が決まりの文様です。

藍羅紗地金繡菊立涌に亀文 羽織

(あいらしやしき きんしゅうきくたてわくにかめもん はおり)

華やかな菊立涌文と吉祥文である亀を散らした、風雅な文様です。亀は、寿命万年のシンボルとして、おめでたい柄とされています。鮮やかな藍色の着物に金糸がよく映えています。風情漂う若武者の役を連想させる羽織です。



紫絹地金繡七宝秋草文 羽織

(むらさききぬじ きんしゅうしっぽうあきくさもん はおり)

紫色の地に赤や白の花々が咲き、金糸とともに色のコントラストを楽しんでいます。細かい金糸で七宝や秋草を描き、繊細で可憐な雰囲気に仕上がっています。

細かな細工も目を惹きます。七宝は円満を表す吉祥文様で、宝尽くしにも使われます。





緋緞子亀甲地錦菊牡丹文 小忌衣

(ひどんすきっこうじ にしききくぼたんもん おみごろも)

小忌衣らしい錦の着物です。緋色を主体とし、大輪を咲かせる菊と牡丹が織られています。衿の上部の巾が少し大きくなり、箱襷(はこひだ)がとってある、瓶覗色(びんのぞきいろ)の立衿が付いています。

小忌衣は、立衿を大きく広げ、紐は華鬘結び(けまんむすび)とするのが特徴です。

丈が短いため、子役用と思われます。

白緞子地錦丸唐草文 小忌衣

(しろどんすじ にしきまるからくさもん おみごろも)

こちらの小忌衣は、色合は地味ですが、どこことなく風格を感じさせます。

小忌衣は、鎌倉時代に武家が公家の着物をまねて、公家と武家が同等の地位である証として、公式の場で着飾るようになった衣裳です。いわば権威の象徴でもあります。

歌舞伎の中では、「実録先代萩」の鶴喜代などが着用します。後継者としての正当な立場を主張しています。



青緞子地金繡雲龍火炎文 千早

(あおしゅすじ きんしゅううんりゅうかえんもん ちはや)

千早は少し変わった形をしています。袖がなく、代わりに袖口は動物の毛で飾られています。「弓張月源家鎬矢」の喜平次のように、忠義深く力の強い武将が身分をやつしている場面で着ています。ぶっ返りになって、着付の下から見せることもあります。

武勇の役にふさわしく、雲間を飛翔する龍が雄々しく描かれています。躍動的な雲が、更に龍の迫力にすご味を加えています。





黒天鷲絨地金繡亀甲菊文 千早

(くろびろーどじ きんしゅうきっこうきくもん ちはや)

この衣裳も、金糸で吉祥文を全面に表現し、白く長い毛を付けた千早です。

こうした動物の毛と豪華な着物の組み合わせは、野に下ってなお御家(おいえ)の再興を志す心をまだ持ち続けていることを暗に意味しています。

また、下部に前、後身ごろとも布が足してあります。芝居で激しく動いても乱れないよう、帯に挟むようにしていたのでしょう。

紅羅紗地万字繫に違鷹羽文 羽織

(べにらしゃじ まんじつなぎにちがいたかのはもん はおり)

赤色系の陣羽織は、歌舞伎では多く使われ、「絵本太功記」や「一谷嫩軍記」などに登場します。中でも、赤色を羅紗地の布に染めた衣裳が多く、舞台の上で赤色がよく栄えます。

羽織の内側には、「内やゆかしき 内ぞゆかしき」の文字が、縫いつけられた綿布に書かれています。



緑麻地錦亀甲花菱紗綾形鶴丸文 羽織

(みどりあさじ にしききっこうはなびしさやがたつるまるもん はおり)

羽織の中でも、戦の時に着用する袖がない羽織で、背の割れた独特な形のを陣羽織と言います。陣羽織の下には、鎧や鎖帷子などを身に付けます。実物は相当な重さがあるため、歌舞伎では軽く動きやすいように紙や軽い布で作られ、実際に着ているかのように見せる工夫がされています。

この陣羽織の内側にも、「内ぞゆかしき 内やゆかしき」と書かれています。

II 四天よてんの勇壮と美

「四天」とは、武勇を誇る役柄が着る衣裳を言います。語源は諸説あり、黄檗宗の僧衣が四ツ身であることから転じたとか、仏教の四天王からとった、などと言われています。

四天の用途も多様で、立役の着る大四天や伊達四天から、捕手や軍兵が着る花四天まで、様々です。転じて、四天を着る役をも「四天」と呼ぶようになりました。

四天の特徴は、衿（おくみ）がなく、袖口が開口し、裾の脇が割れていることです。また、背面中心の意匠であることがより強調されます。龍や獅子といった強靱な架空の動物は、今にも飛び出てきそうなほどの迫力です。

勇壮さを更に際立たせるために、裾にバレンを付けたり、脇を引き上げて裾広がりにしたり、下に伊達下がりをつけたりします。こうした着付け方を「四天取り」といいます。



黒木綿地金繡梅鉢文 バレン付 四天
(くろもめんじ きんしゅううめばちもん ばれんつき よてん)

金糸の台付けに、更にバレンも付いています。前身ごろにしか付いていませんが、かつては後身ごろにもバレンが付いていました。裏地に絹地の錦を使い、所作の途中で少しだけ見える部分にも気を遣っています。

「菅原伝授手習鑑」梅王丸の役衣裳です。特に人気のあった外題のひとつで、三段目車曳の段は、松王、梅王、桜丸の三兄弟が揃い踏みする、見ごたえのある場面です。この四天は丈が短く、子役用と思われます。

黒天鷲絨地金繡雲龍火炎文 バレン付 四天
(くろびろーどじ きんしゅううんりゅうかえんもん ばれんつき よてん)

四天は、背面を重視した文様の配置になっています。この四天も、雲間を飛翔する龍が大きく表現され、手足も鋭く描かれています。勇壮を表現するために、龍、虎、鳳凰、獅子といった動物が画題に多用されています。

着物全体に綿を入れ、見得をきる時に大きく見せ、舞台栄えするように工夫されています。

「日向嶋景清」で使用されました。この芸題は、人気の高い「義経千本桜」の一節を舞踊仕立にした地歌舞伎です。



濃紺緇子地金繡源氏車文 バレン付 四天

(のうこんしゅすじ きんしゅうげんじぐるまもん ばれんつき よてん)



源氏車文は、「義経千本桜」佐藤忠信(狐忠信)を示す文様です。通常、忠信の役衣裳は引き抜きのある四天ですが、この衣裳には引き抜きのない着付の形態になっています。引き抜きのある衣裳の場合、肩紐を引き抜き、ぶつ返りによって下衣を見せ、源氏車文から赤地の宝珠文、さらに白地の宝珠文へと変化していきます。

両脇の腰の辺りにある玉付きの紐は、上に締める丸帯に挟みます。この方法によって、衣裳が持ち上がるため、裾が開きます。この着付け方を四天取りといい、武勇を表現し、舞台上で役者を大きく見せる工夫のひとつです。

黒羅紗地金繡三柘文 バレン付 四天

(くろらしゃじ きんしゅうみますもん ばれんつき よてん)

帯を締める位置を残し、金糸の三柘で埋め尽くされています。細い金糸を使用し、細やかな文様表現をしています。

また、この四天は引き抜きのある衣裳でもあります。裏面の上部には白地錦、下部には紅地錦が合わせてあり、表裏とも、大変豪華な造作になっています。

三柘は、「暫(しばらく)」でお馴染みの文様ですが、初代市川団十郎が考案したと言われています。柘は、「増す」に通じるものとして、縁起の良い文様とされています。



「日向嶋景清」
(個人提供)



紅羅紗地金繡松桜岩波文 バレン付 四天

(べにらしゃじ きんしゅうまつさくらいわなみもん ばれんつき よてん)

金糸、銀糸を効果的に使い分け、松や桜などをうまく衣裳いっばいに表現しています。更に余白を埋めるかのように、桜が咲きほこっています。

バレンは金糸を幾重にも束ね、下方から上部の七宝に至るまで、ひとつなぎで作られています。四天にバレンを付け、見得をきった時に下から見せる伊達下がりにもバレンを付け、豪華で贅沢な金糸をふんだんに使った、贅を尽くした衣裳です。

金絹亀甲地錦龍牡丹文 バレン付 伊達下がり

(きんきぬきっこうじ にしきりゅうぼたんもん ばれんつき だてさがり)

金色の絹地に赤い牡丹、色とりどりの龍が配され、艶やかな構成になっています。

伊達下がりには、役者が動いたり座している時に、四天の下からちらりと見せる役割をします。同じ豪華な作りでも、四天は背面を中心に観る側に強く迫ってくるのに対し、伊達下がりには、動きの合間に少しだけ見えて、観客の気を惹きつける魅力があります。



緋縮緬地金繡源氏車文 バレン付 伊達下がり

(ひちりめんじ きんしゅうげんじぐるまもん ばれんつき だてさがり)

緋色が縮緬地に染められることにより一層際立ち、金繡の源氏車文を引き立たせています。

源氏車文は、「義経千本桜」に登場する佐藤忠信の役を表しています。前に述べた、同じ文様の四天と一緒に着用したのでしょうか。濃紺の四天の下から、金糸のバレンが付いた緋色の伊達下がりが少し見え隠れする。舞台栄えするだけでなく、鮮明な配色まで楽しめます。



紺更紗地山葵文 バレン付 伊達下がり

(こんさらさじ わさびもん ばれんつき だてさがり)



紺と空色の縦縞に山葵の葉を散らした、一風変わった文様です。山葵の葉を陰と陽の二通りに染め抜き、あたかも重ね合わせて散らされているように表現されています。

バレンの七宝部分は、金糸を2本取りにして編んでいます。

謝辞

本展示会を開催するにあたり、小栗幸江様にはご指導やご助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。

また、本展示会に出陳した衣裳は全て平成10年に武藤辰夫様よりご寄贈賜りましたものです。住時の写真は、奥村成二様、各務和子様、前田延枝様よりご提供いただきました。重ねて御礼申し上げます。

§ 参考文献

小栗克助編『美濃の地歌舞伎』（1999・8 岐阜新聞社出版局）

下中邦彦編『歌舞伎事典』（1983・11 平凡社）

奈良県立美術館編『特別展 江戸デザインの爆発歌舞伎衣裳』（1989・4 奈良県立美術館）

博物館明治村編『地芝居の衣裳－歌舞伎の奇想デザイン－』（1992・3 名古屋鉄道株式会社）

早坂優子編『日本・中国の文様事典』（2000・1 株式会社視覚デザイン研究所）

福島県美術館編『歌舞伎の衣裳』展図録（1995・9 福島県美術館）

藤岡町教育委員会編『藤岡の歌舞伎と歌舞伎衣裳』（1990・3 藤岡町教育委員会）

利用案内	
休館日	月曜日・祝日の翌日
開館時間	午前9時～午後4時30分
入館料	大人310円、小人70円

可児郷土歴史館
可児市久々利1644-1
電話 0574-64-0211

◆ 展示説明会

6月23日(土)午後1時30分より 講師:美濃歌舞伎博物館「相生座」 小栗 幸江 館長